

# 魏志倭人傳.15

## 魏志倭人傳 倭王「并(かつ)」

倭王并(かつ)に拝假(はいか)し、詔を齎(せい)し、金帛(きんぱく)・錦罽(きんけい)・刀・鏡・采物を賜う。

倭王并(かつ)に会い、魏皇帝の詔を与え、金帛・錦罽・刀・鏡・采物を賜う。

(47)原文は 拝假倭王并齎詔賜金帛錦罽刀鏡采物 である。難しい文であるが切り方も難しい。  
「并」で切って 拝假倭王并 / 齎詔賜金帛錦罽刀鏡采物 と読む。

### 拝假倭王并

倭王并に拝假す。倭王の次の文字「并」は「并」であろう。意味は「併(あわせる)」「並(ならぶ)」である。「倭王并齎詔賜金帛錦罽刀鏡采物」において「并」が「併せる」「並びに」という意味で使われているとすればこの文字は意味をなさず浮いてしまう。しかし「并」には別の用法がある。それは人名としての用法である。「カツ」と読む。この文では「倭王并」と読むべきであろう。帯方郡太守弓遵の使者建中校尉、梯儻は倭國にやって来た。しかし直接卑弥呼に会ったのではない。もはや卑弥呼が人と会うことはなかった。だが政治外交を代行する王が居た。その王と会った。その王の名前は「カツ」と言ったのである。「拝」は「おがむ・お辞儀をして敬意を表す」である。「假」は「仮の」の意である。「仮に拝す」では意が通じないが、魏の皇帝にお辞儀をするのが「拝」の元々の使用法と考えれば、倭王に頭を下げるのは「拝假」ということになろう。

「并」は「勝」、或いは「葛」である。六世紀の倭國の王「磐井」の子どもは「葛子」といった。この名前は「カツシ」と読むべきであろう。また神武記には「兄猾・弟猾」が登場する。この兄弟の名前も「猾(カツ)」である。「并」は倭國の伝統ある王の名前であった。

神武紀に「葛城」が登場する。「倭國の高尾張邑」を「葛城邑」とも云うと割註がある。この倭國は倭人伝の卑弥呼の國ではない。神武が侵攻した倭國(田川市)である。古代九州には卑弥呼の倭國だけでなく、倭人(実は姫氏)が建国した倭國(姫國)が各地に存在した。田川市もその倭國の一つであった。田川市の「高尾張邑」の別の名前は「葛城邑」と云った。「葛城」とは本来は「葛氏の城」という文字構成であろう。また仁徳皇后が夫仁徳に腹を立てて実家に帰る途中に、「我が見が欲し國は 葛城高宮 我家のあたり」と歌っている。仁徳皇后の実家も田川市の葛城にあった。つまり皇后は「葛一族」の娘ということになろう。

### 齎詔賜金帛錦罽刀鏡采物

魏皇帝の詔を齎し、金帛・錦罽・刀・鏡・采物を賜う。「齎」は「セイ・サイ」で「財宝を持ってくる」の意である。「持ってくる」「与える」「渡す」の意がある。従って「詔を与えた」と読んだ。

倭王、因りて使(梯儻)に上表(皇帝への返書をしたため)、詔恩(皇帝の詔と恩)に答謝す。

倭王并(かつ)はそこで使者に皇帝へのお礼の書を託し、皇帝の詔と恩に答え感謝した。

その四年(243年)、倭王、また使(者)大夫(たいふ)伊聲耆、掖邪狗等八人

を遣わし、生口(しょうく)、倭錦(わきん)、絳青縑(こうせいけん)、緜衣(めんい)、帛布(はくふ)、丹、木柎(もくふ)、短弓、矢を上献す。掖邪狗等は率善中郎将の印綬を壹拝す。

正始四年(西暦243年)、倭王は再び大夫伊聲耆、掖邪狗等八人を派遣して、生口(職人)、倭錦、絳青縑、緜衣、帛布、丹、木柎、短弓、矢を献上した。掖邪狗らは率善中郎将の印綬を頂いた。

その六年(245年)、詔して倭の難升米(灘の将・米)に黄幢(こうどう)を賜い、(帯方)郡に付して假授す。

その六年(西暦245年)、皇帝の命により倭の難升米に黄幢(魏の黄色い旗さし)を与え、帯方郡長官に託して假授した。

その八年(247年)、太守王頎(おうき)、官(帯方郡の役所)に到る。

その八年(西暦247年)、太守王頎王祈が帯方郡の官庁に赴任してきた。

倭の女王卑彌呼、狗奴國の男王卑彌弓呼と素(もと)より和せず。倭の載斯(さいし)烏越(とりごえ)等を遣わし、(帯方)郡に詣り、相攻撃する状を説く。

倭國の女王卑彌呼は、狗奴國の男王卑彌弓呼と元々仲が良くなかった。そこで女王は倭國の祀司、烏越(とりごえ)等を帯方郡に派遣して、両國の争いの様子を説明した。

(48)「載斯」の読みは「さいし」である。これは中国側の表記であるが倭國での表記に戻すと「祀司」であろう。烏越は中国王朝風の一字名ではなく和名の「とりごえ」である。倭國には生死に関わる祀りごとを司る専門職がいた。卑彌呼の國であった八女市には約300基の古墳がある。古墳に死者を葬るとき祀司による葬儀が執り行われたのは当然であろう。

(太守王頎は)塞曹掾史(さいそうえんし・郡の属官名)張政(ちょうせい)等を遣わし、因りて詔書・黄幢(こうどう)を齎(せい)し、難升米(灘の将・米)に拝假す。檄(回状)を為して之を告諭(こくゆ)す。

それを聞いて太守は属官の塞曹掾史、張政等を派遣して、皇帝の命令と黄幢を持参して難升米に会い与えた。彼は回状を作ってこのことを國の人々に告示した。

## 魏志倭人伝 卑彌呼の死

卑彌呼以て死す。大いに冢(ちょう)を作る。徑百餘歩。徇葬(じゅんそう)する者は奴婢百餘人。

卑彌呼が死去した。大きな塚が作られた。その塚の直径は約百歩(33m)であった。百人以上の奴婢が殉葬された。

(49)卑彌呼が亡くなり古墳に葬られた。卑彌呼が居た都は八女である。卑彌呼の古墳は八女に存在すると考えてまちがいないであろう。八女丘陵には300基の古墳が存在する。この中の直径33mの古墳に卑彌呼と百人の女官が眠っている。

